

覚化の潜在的な歴史的省察から再浮上させ、ゲーテンベルグ革命に匹敵する現今のメディア革命が直面する、医学、教育、法律に渉る案件を縦横に考察する。レンズによる視覚器機がデジタル情報の相互反響に代替された局面で、インターフェイスの透明化と媒体の共約性とをひたすら追求するテクノロジー至上主義の倫理的ジレンマが暴かれる。アメリカ十八世紀学会会長も務める才媛の新論集『グッド・ルッキング』も、会期中にトリニティー・カレッジの書店に並んだ。

すらりとした長身に長すぎる腕。一瞬研ナオコとも見まがう年齢不詳の顔立ち。感性鋭い少女がそのまま大学者となってしまった。遺憾ながら鳴物入で日本に招かれるのも時間の問題ですよと注進すると、実は私、横浜育ちな。といたずらっぽい笑顔で来意を示された。

Barbara Maria Stafford, *Good Looking*, MIT Press. 1996.

速読①  
視覚野のクロスカッティングとアカデミズムの爆縮

頭脳は情報の「つつ抜け」に耐え得るか

稲賀繁美  
haga shigemitsu  
三重大学・フランス文学

先日、バーバラ・マリア＝スタフォードとおしゃべりする機会に恵まれた。ダブリンで開催された「言語と映像研究学会第4回集会」で一緒になった次第。直撃インタビューなんてはしたくない事は柄にもない。

彼女の仕事は既に高山宏氏がその勤所を逃さず紹介している。『ボディー・クリティシズム』(1991)『アートフル・サイエンス』(1994)の二近著。日本語訳が進行中とのことはご承知だったが、日本の洋書店で自著のペーパーバックが平積みで売れているとは思ってもおられない。例の息せき切った前倒しのつんのめり文体まで日本の訳者は生かそうとしているのですよ、と申すと、少女のように眼を輝かせ、はしゃいだ反応が返ってくる。

フーコーの言語戦略に否を突きつけ、新たなイマジストを提唱する彼女は、言語学的ポスト＝モダニズムの解釈の廃墟を蔽う視覚プラクシスを押し進め、脱構築の死体検証ならぬ、視